

あさのは

平成27年7月10日発行

発行：長岡赤十字病院

長岡市千秋2丁目297-1

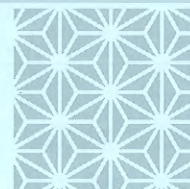
電話 0258-28-3600

ホームページアドレス

<http://www.nagaoka.jrc.or.jp/>

長岡赤十字病院健康だより

「あさのは文様」という麻の葉をデザインしたものがあります。麻は丈夫で縁起がよく、健康を願って、昔から私たちの身のまわりの模様として使われてきました。これをお読みになる皆様の健康を願い、「あさのは」と名づけてあります。



リンパ浮腫外来を開設しました

今年度4月からリンパ浮腫外来を開設しております。皆さんは、リンパ浮腫とはどのような状態になることをイメージされますか？

リンパ浮腫とは？

何らかの原因でリンパの流れが悪くなり、皮膚の下、主に脂肪の間にリンパ液が貯留することで生じるむくみのことです。

主な原因は？

悪性腫瘍の手術の際、腫瘍の広がりを防ぐ目的で腫瘍近くのリンパ節を取り除くリンパ節郭清（例：乳癌手術の腋窩リンパ節郭清・婦人科、泌尿器科領域の悪性腫瘍切除における骨盤内リンパ節郭清）や放射線治療によってリンパ管が傷害されることで生じる場合が8割以上といわれています。リンパ節郭清や放射線治療によってリンパ管は経路の一部を取り去られた形となり、リンパ管の中を流れるリンパ液が外に漏れ出してリンパ浮腫が発症します。初めのころはむくみが出現しても、むくんだ上肢や下肢を挙上（上にあげる）することで浮腫は軽減しますが、放置すると皮膚が硬くなったり、水ぶくれができたり、蜂窩織炎（細菌感染による広範な炎症）などを引き起こすことがあります。

リンパ浮腫は、適切な日常生活の過ごし方やケアの方法を知ることによって悪化を防ぐことができます。リンパ浮腫でお困りの方、リンパ浮腫について更にお知りになりたい方は、保険外診療になりますが、リンパ浮腫外来を受診することができます。受診を希望する方は、各科看護師にご相談下さい。

（リンパ浮腫セラピスト 山田）

〈リンパ浮腫外来で行っていること〉

1. リンパ浮腫の説明、状態観察
2. リンパ浮腫悪化予防の生活相談
3. セルフドレナージの説明
4. 弾性着衣の相談や定期交換など

外来日：水曜日14：00～下肢
木曜日13：30～上肢
場 所：2階相談室

※当院婦人科及び乳腺外科で手術を受けた患者様に限らせていただいております。

幼児の安全シリーズ 第3回

こどもは、具合が悪くなくてもどこがどのように悪いのか上手く訴えることができません。全身の観察をして、普段と違うことに早く気づくことが大切です。

おやっ!と思ったら ~こどもの観察ポイント~

- * 便 : 量・色、混入物(血液・粘液・膿・消化しない食物)、固さ、便秘、下痢、におい、回数
- * 尿 : 量・色・におい、混入物、回数
- * 鼻 : 鼻水が出るか、乾くか、つまるか、くしゃみが出るか
- * □ : 唇の色はどうか、いちご舌(舌の表面がいちご状に見える)があるか、
□の中の痛みがあるか(□内炎)
- * 食 欲 : なくなったか、増しているか、普通であるか
- * 痛 み : どこが、どんなとき、どの程度、どのように痛むか(からだの姿勢はどうか)
- * 表 情 : いきいきしているか、ぼんやりしているか、目つきや目の動きがおかしくないか
- * 睡 眠 : 眠らないか、うとうとする程度か、ぐっすり眠っているか
- * その他 : 吐いたか、けいれんがあるか、意識はどうか、体重の増減、呼吸脈拍など、
機嫌の良し悪し、呼吸困難、おなかの様子、股の付け根が腫れていないか など



病気の予防にこころがけましょう

こどもは病気にかかることによって、一つ一つの免疫を獲得し、病気に対する抵抗力をつけていきますが、病気にかかりやすく、かかると重くなることがあります。「眠る・食べる・遊ぶ」と心身ともに充実した生活での基礎体力づくりが大切です。また、ウィルスや細菌を寄せつけないために、成長・発達に応じた手洗い・うがいなどの清潔習慣を、こども自身に身につけさせましょう。(幼児安全法指導員 高橋)



当院の
医療技術職員
業務紹介Part10

臨床検査技師の業務紹介

その1 臨床検査技師とは…

今回は臨床検査技師についてお話をします。臨床検査技師は医師や看護師、薬剤師などに比べると比較的若い国家資格の医療技術職です。臨床検査技師は病院で実施される検査のうち、レントゲンを使用する検査以外はほとんどの検査で何らかの形で関与しています。例えば、内視鏡検査では検査技師は直接関与しませんが、検査の際に採取された検体は臨床検査技師が検査を行っています。したがって、現代医療では診断・治療に欠かせない職と言えます。検査の仕事は大きく分けると検体検査、生理検査、病理検査に大きく分けることができます。検体検査は血液、尿、便、分泌物、体液(腹水など)の性状を調べます。検体検査は更にコレステロールやGOT、GPT、血糖値、腫瘍マーカー、ホルモンなどを測定する生化学検査、検尿や検便検査の一般検査、貧血や白血球の分類(白血病も含む)、凝固検査(血の止まり方)を調べる血液検査、輸血が必要な時に副作用の起さない適合血を準備する輸血部門、細菌を検出し、その細菌に良く効く抗生物質は何かを検査する細菌検査などに分けられています。生理検査は心電図、超音波(エコー)、呼吸機能、脳波など患者さんに直接触れる検査を行います。また、当院では「正しい検査結果は正しい検体採取から」の考えのもとで採血部門も生理検査に含めています。最後の病理検査は病理診断を行う為に手術や生検の検体から病理標本の作成を行います。また、細胞診検査では病理医が標本を観る前に最初に標本を観察し、癌の疑いがあるのか無いのかをスクリーニングします。

次号から上記の専門分野について詳しく紹介していきます。(臨床検査技師 山田)